

常行堂本尊 木造 阿弥陀如来坐像

平安時代
檜(ひのき) 寄せ木作り
像高：256cm
平成7年6月15日 国重要文化財指定



常行堂の本尊で、本像は丈六像で頭部の螺髪は大粒の半球形をなし、肉髻珠と眉間白毫は水晶がはめこまれている。両肩の張りは大きく、特に右肩は威り、左肩はやや撫肩。胸部の開きが大きい。着衣は右肩に衣の一端が打ちかかる形式。両手は弥陀定印を結び、坐勢は右足を上に足の表裏を結んで坐ったスタイル。体内の血縁者名などから性空上人の弟子仏師安鎮が造った可能性が高く貴重なものである。

なお、書寫山圓教寺の北5kmにある姫路市夢前町寺の弥勒寺の弥勒仏も、この阿弥陀如来坐像と似ており、安鎮の作といわれている。

本多家廟所〈5棟〉

江戸時代
各方2間、宝形造、本瓦葺
内部に五輪墓碑をおく
昭和45年3月30日 県重要文化財指定



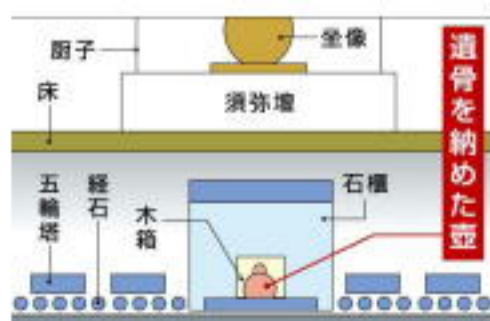
大講堂のそば、土堀に囲まれた姫路城主本多家墓所内に並立している。忠勝・忠政・政朝・政長・忠国の5代の廟屋で、5棟ともほぼ同一の構造形式である。寛永3年(1626)建立の忠勝廟を最古とし、忠政廟(1631)・政朝廟(1638)・政長廟(1685)・最新の忠国廟は宝永元年(1704)の建立である。

本多家は姫路城主に2回なっており、本多忠政・政朝・政勝(伊勢桑名より来姫、元和3年(1617)～大和郡山へ移る、寛永16年(1639)の時代と、第二次本多時代といわれる本多忠岡・忠孝(陸奥福島より来姫、天和2年(1682)～越後村上へ移る、宝永元年(1704)の5代からなる。

江戸初期から中期にわたる廟建築として、県下でも類例のない貴重な遺構である。なお、この墓所内には千姫の夫であった本多忠刻とその子幸千代などの墓もある。宮本武蔵の養子三木之助は、忠刻の小姓で剣の指南役。忠刻の死を江戸で知り墓前で割腹殉死をした。

性空上人 御真骨にまつわる品々〈食堂2F展示〉

現在、圓教寺では県指定重要指定文化財である開山堂の保存修理工事を実施している。今回、床部分の工事を行っていたところ、床下から経石や五輪塔とともに、壺に納められた遺骨が発見され調査の結果、遺骨が圓教寺開祖の性空上人のものであると確認された。宝物館である食堂の2階にて御真骨の周りから発見された品々と写真を特別展示してあるので、この機会に是非見学しておきたい。



石棺が発見された開山堂内陣床下の断面図(左)

金欄に包まれた蔵骨器(中央)とそのX線写真(右)